肯定・否定表現における日本語程度副詞について

～「とても」「なかなか」「まったく」それぞれの差異に注目して～

九州大学文学部人文学科
言語学・応用言語学専攻
1LT01135W
平成 13 年入学
松田　明子
平成 17 年 1 月提出

要旨

本論文では、先行研究である仁田(2002)の分析を足掛かりに、「とても」「なかなか」「まったく」を中心とした日本語の程度副詞について、肯定表現と否定表現、それぞれの副詞の特徴を区別し、その機能の分類を行った。その中で、仁田(2002)では‘純粋程度の副詞’として一括されているこれら３つの副詞の間にも、単なる程度の差以外の区別すべき固有の特徴があることが明らかになった。それは肯定表現「なかなかやるなぁ」「まったくだ」に代表される「なかなか」の‘評価’の要素、「まったく」の‘実感の強調’の要素である。これらの要素を個別に持つことによって、同じ純粋程度の副詞で、かつこのような固有の要素を持たない「とても」とはそれぞれ異なる働きをするのである。本研究では、今まで一まとめにされてきた程度副詞群をより鮮明なものにしていくための一つの手がかりとしてこのような見解を提示する。

目次

０．はじめに.....1
１．先行研究.....1
1.1 程度副詞の機能.....1
1.1.1 純粋程度の副詞と共起可能な動詞.....2
1.2 動詞の分類.....4
２．否定表現の副詞.....6
2.1 否定表現の副詞の機能.....6
2.2 否定の「とても」.....7
2.3 否定の「なかなか」.....8
2.4 否定の「まったく」.....8
３．肯定表現の副詞.....9
3.1 肯定表現の副詞の機能.....9
3.2 肯定の「とても」.....10
3.3 肯定の「なかなか」.....11
3.4 肯定の「まったく」.....12
４．肯定表現における各副詞の特徴.....12
4.1「なかなか」の‘評価’の要素.....12
4.1.1 読み込み説.....13
4.1.2 程度性付与説.....14
4.2「まったく」の‘実感の強調’の要素.....15
５．まとめ.....18
参考文献.....21

０．はじめに

我々は、自分の伝えたいことを少しでも正確に伝えるために、さまざまな作用を持つ単語をつなぎ合わせて言葉にしている。それらの単語は特徴に応じ、いくつかの品詞に分類され、今日まで数多くの研究の対象となってきた。本研究では、従来他の品詞に比べ、分析・研究が立ち遅れてきた副詞に注目し、特に程度副詞と一般に言われている副詞群に、より細かなメスを入れていきたいと思っている。そもそも私が程度副詞に興味を持ったのは、「とても」「なかなか」「まったく」などの肯定・否定両表現に使用可能な副詞の存在が気になったことに端を発する。これらの副詞は肯定表現と否定表現とでは、その機能に違いが見られ、共起する述語に関しても制限がある。先行研究とする仁田(2002)では、副詞を、結果の副詞・様態の副詞・程度量の副詞・時間関係の副詞、の４つに分け、それぞれ機能や性質に関する組織的な分析・記述が試みられている。中でも共起する述語については各副詞の持つ特性によってかなり制約があり、今回取りあげる程度副詞（仁田(2002)では程度量の副詞）においてもその共起状況は非常に複雑のものとなっている。しかしながら仁田(2002)では、肯定表現における共起状況についての記述はあるものの、否定表現に関しての詳しい分析はなされていない。そこで本研究では、否定表現における副詞の機能とその述語の状況を、既存の肯定表現に関する記述と併せて分析していき、肯定と否定とではどのような違いが存在しているのかを明示していきたい。それにともなって、各副詞が独自に持つ要素・作用なども明らかにし、今まで一まとめにされてきた程度副詞群についてより鮮明な説明が加えられればと思う。

１．先行研究

1.1 程度副詞の機能

仁田(2002)は程度量の副詞に一括されている副詞に関して、述語の属性・状態を限定するものと、主語や対象の数量限定や動きの量限定をするものとの区別を明瞭にし、以下のような分析を行っている。

・テストフレーム
[I]　「オ酒ヲ[X]飲ンダ」／「[X]歩イタ」
　　「氷ヲ[X]割ッタ」／「[X]寝タ」
[II]　「彼ハ[X]大キイ」　　仁田(2002:163)

このテストフレームを使うと、程度量の副詞をさらに、純粋程度の副詞・量程度の副詞・量の副詞に分けることができる。[X]に適当な副詞を入れてみて、[I]の場合は、主体や対象の数量限定や動きの量の限定（いわゆる‘量限定’）を、[II]の場合は、述語の‘程度限定’が違和感なく行われるかどうかを判断の基準とする。そしてその基準の

下、[Ⅰ][Ⅱ]両方に挿入可能な副詞が量程度の副詞、[I]のみ可能な副詞を量の副詞、[II]のみ可能な副詞を純粋程度の副詞と位置付ける。

具体的に示すと、「相当」という副詞は[I]「お酒を相当飲んだ／相当歩いた」[II]「彼は相当大きい」、共に挿入可能であるが、「いっぱい」という副詞では[I]「お酒をいっぱい飲んだ／いっぱい歩いた」[II]「*彼はいっぱい大きい」というふうに、述語の属性・状態の程度限定は行うことはできない。また「非常に」という副詞では[I]「??お酒を非常に飲んだ／??非常に歩いた」[II]「彼は非常に大きい」というふうに、主体の数量限定や「飲む」という動きの量限定は難しい。逸脱性が薄まる場合があるとすれば、「お酒を非常に（たくさん）飲んだ／非常に（よく）歩いた」など、何らかの量限定を付与する成分を読み込んでいる場合である。このような程度量の副詞に属する各副詞群の働き・機能のあり方は次のように図示してある。

・程度量の副詞の機能分担

程度限定 ｛ 純粋程度の副詞
　　量程度の副詞 ｝ 数量限定
　　量の副詞 ｝

仁田(2002:164)

1.1.1 純粋程度の副詞と共起可能な動詞

このような分類の下で、述語の属性・状態の程度限定しか行うことの出来ない純粋程度副詞は、常に‘スケール’や‘度合い’といったものを帯びた属性や状態を表す形容詞に係ることがその中心的な働きのように思える。（逆に言えば、主体や対象の数量限定、動きの量限定を行うことしかできない量の副詞は形容詞よりも動詞に係ることの方が一般的である。）しかし実際には、純粋程度副詞も多くの動詞との共起が見られ、仁田(2002)では純粋程度副詞と共起する動詞として、以下の四つの動詞群を挙げている。

(1)程度性を有する状態動詞

「違う」「異なる」は、その状態に程度を有している。また、状態動詞でなくても、「恵まれている」のように、「恵まれる」という動詞に「ている」のついた状態動詞的な表現であれば共起可能である。

例）　１％枠があるとないとでは、大変に違う。
　　私は、経済的には非常に恵まれた環境に育ったわけだ。

(2)非限界変化動詞

動き（変化）に終端性・限界がなく、動き（変化）の結果の状態に終端性・限界がない状態を生み出す動詞(仁田 2002:173)

例）　高原の夜はたいそう冷えるのです。
　　…労働行政への信頼を著しく損なうとも指摘した。

(3)心的活動動詞

ある種の心的状態・感情のありようを作り出す（帯びる）心の動き・作用を表すもの(仁田 2002:176)

例）　私は非常に苦しんだ。
　　しかも僕も非常に感動した。

(4)態度の表れに関わる動きを表す動詞

心的･情意的な評価や態度のあり方を含んだ動き･働きかけを表している(仁田 2002:177)

例）　…座がしらである宝来屋が大変可愛がって、…
　　…非常に苦労されて、…（敬語表現）

以上が、仁田氏が挙げる純粋程度副詞と共起可能な動詞である。(1)は動詞そのものが表す程度性、(3)～(4)は動詞の表す動作なり変化に限界がないということが共通の特徴で、その非限界性が純粋程度副詞との共起の条件と言えよう。

ここで否定表現に関する記述を集めてみると、

> 程度限定と量限定の両者に使われる量程度の副詞は、程度限定にしろ量限定にしろ、極端な領域―高程度や多量域―を表さない。（中略）―もっとも、否定文脈に対しては、極端な領域である全否定をも、量程度の副詞が担っている。というより、この種のものには、純粋程度と量程度の分化がない―。仁田(2002:167)
>
> …「たいして、さほど、あまり、さして、そんなに、ちっとも、少しも、一向に、てんで、全然、まったく」（中略）…これらは、「今日は{タイシテ／少シモ／全然}暑くない」とともに、「酒を{タイシテ／少シモ／全然}飲まなかった」「{タイシテ／少シモ／全然}」歩かなかった」のように、形容詞の表す属性・状態の程度限定を行う構文にも、数量の限定を行う構文の中にも現れうる。したがって、この種の、否定文脈で使われる程度に関わる副詞は、基本的に量程度の副詞である。仁田(2002:167)

このような記述より、仁田(2002)では、否定表現における程度量の副詞は、肯定表現のそれよりも境界が曖昧で、言い換えればほとんどが量程度の副詞になるという分析がされている。

1.2 動詞の分類

肯定・否定表現における程度副詞の状況を見ていく前に、まず、副詞と共起する日本語の動詞にはどのようなものがあるかを整理したいと思う。日本語の動詞研究においてその基礎とも言える業績を残した[1]金田一春彦氏は、シンプルに動詞を４つに分類した。

金田一氏は、動詞に「ている」がつくかつかないか、「ている」がつく場合、「動詞＋ている」の表す時間的な意味は継続なのか、瞬間なのか、という視点に基づいて、状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞の４つに動詞を大別する。その内容を簡単に説明すると、以下のようになる。

(5)状態動詞…動作・作用を表すというよりも、むしろ状態を表す。「ている」をつけることなく状態を表すことができる。
例）在る、居る

(6)継続動詞…明らかに動作・作用を表す。「ている」をつけると、その動作・作用が進行中であることを表す。
例）走る、吹く、押す、苦しむ、喜ぶ、心配する

(7)瞬間動詞…動作・作用を表す動詞であるが、その動作・作用は継続することが困難な場合が多く、「ている」をつけると、その動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。
例）死ぬ、届く、消える、太る、疲れる、結婚する

(8)第四種の動詞…時間の概念を含まない点で状態動詞に似ているが、状態動詞がある状態にあることを表すのに対して、ある状態を帯びることを表す。いつも「ている」をつけることによって状態をあらわすのに用いられ、単に動詞のみの形で動作・作用を表すのには用いられない。
例）聳える、異なる、違う

このように、金田一氏はそれまでの動詞研究をまとめた上で動詞全般の分類を試みた。これは後の動詞研究に大きな影響を与えたことに違いはないが、全ての動詞がこの分類にきれいに収まるとは言えず、二つ以上の項目にまたがるものも数多くあるということを自身も認めている。しかし、今回の研究では、この分類に仁田(2002)の見解を併せたものを動詞を語る上での基礎とする。仁田氏は純粋な動詞の分類をしようとしたわけではなく、動詞と副詞との関係を見ていく中で先に挙げた(1)～(4)の動詞を明示しただけである。そこで(1)～(4)の動詞群と対を成すものなどにも、適当な名称を付け以下に示す。

(9)程度性を有さない状態動詞（⇔程度性を有する状態動詞）
「違う」「値する」「異なる」は、その状態に程度性を有している。一方、同じ状態動詞でも、「在る」「居る」など、その状態は‘在るのか無いのか’、‘居るのか居ないのか’のどちらかで、状態に程度性を有さないものもある。これを程度性を有さない状態動詞と呼ぶことにする。

(10)限界変化動詞（⇔非限界変化動詞）
動き（変化）に終端性・限界があり、動き（変化）の結果の状態に終端性・限界のある状態を生み出す動詞を限界変化動詞とする。

(11)単なる動作動詞（⇔心的活動動詞）
一般に心的状態・感情のありようを帯びない動き・働きかけを表す。

この仁田氏の分類を金田一氏の分類に当てはめてみると、以下のようになる。本研究では、金田一氏の状態動詞と第四種の動詞は、どちらも常に状態を表す動詞であることから、共に状態動詞として扱うこととする。

状態動詞
- 程度性を有する状態動詞（違う、異なる、値する、要る）
- 程度性を有さない状態動詞（在る、居る）

継続動詞
- 心的活動動詞（苦しむ、喜ぶ、悲しむ、心配する、思う）
- 態度の表れに関する動きを表す動詞（可愛がる、重視する、苦労する）
- 単なる動作動詞（走る、吹く、押す、歩く）

瞬間動詞
- 限界変化動詞（死ぬ、開く、届く、消える、行く、結婚する）
- 非限界変化動詞（太る、温まる、疲れる、似る）

この論文では、さまざまな表現における程度副詞の状況を主に意味的な視点に立って考察する。その中で、肯定表現と否定表現でのそれらの役割を、上記の動詞の分類などを参考に、共起する述語の特徴なども併せて細かくみていく。なお本文中、「程度副詞」

[1] 金田一春彦「国語動詞の一分類」(『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976)

と呼んでいるものは、仁田(2002)で言う「純粋程度の副詞」、「量程度の副詞」、「量の副詞」、これらすべてを総括して指すものとする。

２．否定表現の副詞

2.1 否定表現の副詞の機能

仁田(2002)で否定表現で使われる程度副詞として挙げられているものに、わたし自身が思い付いたものを付け加えて、次のようなものを否定表現で使用される副詞の代表例として挙げる。

(12)　たいして、さほど、あまり、さして、そんなに、ちっとも、少しも、一向に、てんで、全然、全く、決して、とても、なかなか

これらの副詞の機能として、〈程度の限定〉〈量の限定〉があることは肯定表現の様相からして簡単に推測できる。ただ否定表現の場合、程度限定から離れてさらに別の機能も有している。それらをここでは〈可能性の限定〉、〈既遂の限定〉と呼ぶことにする。以下に、これらの機能の説明を行う。

(13)　彼はたいして大きくない。
(14)　その本はさほど古くない。
(15)　かわいいぬいぐるみを見せても、彼女はちっとも喜ばなかった。
(16)　昨夜の飲み会ではあまり飲まなかった。
(17)　こんな状況じゃとても死ねない。
(18)　夜行列車は一向に到着しない。
(19)　実験結果の分析はなかなか進まなかった。

(13)(14)では「大きい」「古い」という形容詞に係り、その程度性を限定し、(15)では「喜ぶ」という心的活動動詞の持つ程度性を限定していると言える。(16)では「飲む」という述語に対して、その対象となるもの、ここではお酒であるが、その量の限定が行われている。(13)〜(16)が、〈程度の限定〉もしくは〈量の限定〉が行われているのに対し、(17)ではそのいずれでもない〈可能性の限定〉が行われている。「死ぬ」という限界変化動詞にも係ることができていることは、その副詞の作用が程度限定とは異なる作用であることの裏付けと言える。ここでの「とても」は「死ぬ」という動詞に係ることによって、死ぬことが可能性的にも非常に低く、それを成し遂げることが困難であることを表している。さらに(18)(19)は、〈既遂の限定〉を行っている例である。〈既遂の限定〉をする副詞とは、動詞の表す動きや変化が行われたことによって、状態が変化したかどうか、事態が新たな状況に突入したかどうかを示すものである。(18)では列車が「到着する」という状態にまだ変化していないこと、(19)では分析が「進む」という状況に突入していないということを、それぞれ「一向に」「なかなか」という副詞を使って表している。〈既遂の限定〉を行う場合、事態や状況が変化しない状態を表す述語とは共起できない。

(20)　一向に（眠たくならない／*眠たくなっていない）
(21)　なかなか（自供しない／*自供していない）

否定表現においては、以上のような機能を挙げることができるが、副詞がどの機能を持つかは、それぞれ違い、いくつかの機能にまたがるものもある。

次に特に注目したい「とても」「なかなか」「まったく」について個別にみていくことにする。

2.2 否定の「とても」

否定表現での「とても」は可能性の限定を行う。

(22)　喜ばない　悲しまない　可愛がらない　太らない　走らない　死なない
(23)　*かわいくない　*美しくない　*醜くない　*綺麗でない　*馬鹿でない
(24)　*異ならない　*違わない　*居ない
(25)　*喜んでいない　*可愛がっていない　*走っていない
(26)　喜べない　悲しめない　可愛がれない　太れない　走れない　死ねない

共起できる述語は、基本的に動詞のみで、その中でも変化を伴なうもの（継続動詞・瞬間動詞）に限られる。よって(23)(24)のように、形容詞・形容動詞・状態動詞とは共起し得ない。それは、(25)のような、変化動詞に「ている」をつけ状態を表す形にしても同じことが言える。また日常では(26)のように可能の形での共起の方がポピュラーである。しかしここで、先に共起不可能と述べた状態動詞の例外を紹介する。

(27)　居られない
(28)　喜んでいられない　可愛がっていられない　走っていられない

可能の要素を加えた(27)「居られない」の場合、否定の「とても」と共起可能になる。可能の要素が加わった「居られる・居られない」はある存在状態を維持することを強調して表すものとして「居る・居ない」と区別できる。この維持するかしないかに関しての強調が一般の状態を表す述語とは違い、ある種変化動詞のような働きをするため、否

定の「とても」との共起が許されると思われる。それゆえ(28)のような、先に共起不可能と述べた変化動詞に「ている」をつけた形に、さらに可能の要素（「～いられない（居られない）」）を加えた場合、共起可能に転じる。

2.3 否定の「なかなか」

否定表現における「なかなか」は主に既遂の限定と数量限定を行う。共起できる述語は否定「とても」と同じく、変化を伴なうことが必要で、形容詞、形容動詞には共起できず、変化を伴う動詞（継続動詞・瞬間動詞）と直接共起可能である。また変化を伴なう動詞に「ている」をつけ、状態を表す述語にした場合、これも否定「とても」と同じく共起不可能となる。

(29)　*かわいくない　*美しくない　*醜くない　*綺麗でない　*馬鹿でない
(30)　喜ばない　悲しまない　可愛がらない　太らない　走らない　死なない
(31)　*異ならない　*違わない　居ない
(32)　*喜んでいない　*可愛がっていない　*太っていない　*走っていない
(33)　喜べない　悲しめない　可愛がれない　太れない　走れない　死ねない
(34)　OK？居られない
(35)　OK？喜んでいられない　OK？可愛がっていられない　OK？走っていられない

このように、共起可能なものは否定の「とても」と基本的には同じだが、状態動詞「居ない」には共起が許される。しかし「なかなか居ない」になった場合、既遂の限定からは離れて数量限定としての役割が強いと考えられる。また、可能の要素を持たせた(34)「居られない」並びに、(35)「喜んでいられない」などは容認性にかなり個人差が見られ、状況や文脈によるところが多いと思われる。

2.4 否定の「まったく」

否定の「まったく」は、程度限定・数量限定・可能性限定を行う。そして、あらゆる形容詞・形容動詞・動詞と共起可能となる。

(36)　かわいくない　美しくない　醜くない　綺麗でない　馬鹿でない
(37)　違わない　異ならない　値しない
(38)　居ない
(39)　苦しまない　同感しない　可愛がらない
(40)　走らない　吹かない　死なない　開かない　結婚しない
(41)　太らない　温まらない　疲れない
(42)　苦しんでいない　同感していない　可愛がっていない　太っていない　温まっていない　疲れていない
(43)　居られない　苦しめない　走れない　太れない
(44)　苦しんでいられない　走っていられない　太っていられない

(36)(37)のように形容詞・形容動詞や「違わない」「値しない」など程度性を有する状態動詞と共起する場合は程度限定、(38)のように「居ない」など程度性を有さない状態動詞と共起する場合は量限定、(40)「死なない」「開かない」など限界変化動詞と共起する場合は量限定もしくは可能性の限定を一般に行う。このように、量限定、程度限定、可能性限定のうちどれを行うかは、共起するものの特徴と文脈による。

３．肯定表現の副詞

3.1 肯定表現の副詞の機能

程度副詞の肯定表現に関しては、この論文の 1. でも示したような仁田(2002)をはじめ、過去多くの分析・研究が行われてきた。程度副詞はその特徴によって３種類に分類でき、それぞれ「純粋程度の副詞」「量程度の副詞」「量の副詞」と仁田(2002)では名付けられている。

(45)純粋程度の副詞…とても、なかなか、まったく、極めて、非常に、大変、著しく
(46)量程度の副詞…かなり、けっこう、相当、めちゃくちゃ、少し、ちょっぴり
(47)量の副詞…たくさん、いっぱい、たっぷり、ふんだんに、大勢

それぞれ具体的にどのような副詞が当てはまるかを上の(45)～(47)に示した。基本的に同じ副詞群に属していれば、共起する述語は共通している。簡単にまとめると、純粋程度の副詞は、形容詞・形容動詞・純粋な程度性（述語の属性・状態そのものの程度）を持つ動詞（(48)に示す）と共起可能で、量の副詞は形容詞・形容動詞とは共起しないが、動詞に関しては、基本的に 1.2 で分類した全ての動詞と共起可能である。

(48)　程度性を有する状態動詞、心的活動動詞、態度の表れに関する動きを表す動詞、非限界変化動詞

量の副詞が純粋程度の副詞に比べて共起可能な動詞の種類が多いのは、その数量限定の対象が、述語が表す動きの数量のみならず、主語や対象の数量にまで及ぶからであろう。

(49)　今日は朝から、たくさん走った（動きの数量（‘量’または‘回数’））

(50)　今年の大会はアメリカ人がたくさん走った（主語の数量）
(51)　そのアメリカ人は世界中の有名な競技場をたくさん走った（対象の数量）

このように、量の副詞「たくさん」は「走った」という述語に対してその動きの数量限定のみならず、(50)(51)のような主語や対象の数量限定も成し得る。また、動きの数量限定も、さらに細かく分類することができ、(49)の場合も「たくさん」が走る距離や時間といった動きの‘量’を限定している解釈と、走るという動作を繰り返す‘回数’を限定している解釈の二通りが考えられる。このような限定の幅の広さゆえに、量の副詞は、動詞の持つ状態の程度性の限定しか行えない純粋程度の副詞に比べて共起できる動詞の種類が多い。「届く」という限界変化動詞を例にとると、この動詞は通常、動作そのものの状態の程度性は持ち合わせていないので、純粋程度副詞との共起はできない（(52)）。しかし「届く」は、その‘回数’や主語の数量を限定することはできるため、量程度の副詞とは共起可能となるのである（(53)）。

(52)　*彼からの手紙がとても届いた
(53)　彼からの手紙がたくさん届いた

そして量程度の副詞は、純粋程度の副詞の機能と量の副詞の機能を両方持ち合わせているため、共起可能な述語は、形容詞・形容動詞・すべての動詞と、非常に幅広いものとなる。

次に今回注目している「とても」「なかなか」「まったく」について、肯定表現も詳しく個別に見ていきたいと思う。

3.2 肯定の「とても」

肯定「とても」は純粋程度副詞であり、程度限定のみを行う。

(54)　かわいい　美しい　醜い　綺麗だ　馬鹿だ　なまいきだ
(55)　異なる　違う
(56)　苦しむ　喜ぶ　可愛がる　苦労する　太る　温まる
(57)　苦しんでいる　喜んでいる　苦労している　太っている　温まっている
(58)　*在る　*居る
(59)　*走る　*吹く　*押す　*歩く
(60)　*投げる　*死ぬ　?開く

(54)はもともと程度性を持つことが前提である形容詞と形容動詞、(55)は程度性を持つ状態動詞、(56)は、動き（変化）に限界がなく、動き（変化）の結果にも限界がない状態を生み出す動詞である。これらは変化の進展、変化の結果生じた状態の有する程度性、もしくは心的活動事態の程度性を限定する（仁田 2002；第６章）。これらの動詞に対し、(57)のように「ている」をつけ状態を表す形にした場合も、共起条件に変化はない。(58)のように程度性を持たない状態動詞「在る」「居る」や、(60)のような動き（変化）に限界がある動詞「投げる」「死ぬ」「開く」（限界変化動詞）は程度限定できない。(59)の単なる動作動詞は、その動きに限界性はなく、(56)に分類できそうだが、「とても」との共起はできない。このことに関して仁田(2002)では、「走る」「吹く」「押す」などが持つ非限界性は、動きの‘量（時間）’の非限界性であり、動詞そのものが表す有り様の非限界性ではない。よって、このような動詞の持つ非限界性の質の違いから共起できるできないが区別されると述べている。

3.3 肯定の「なかなか」

肯定「なかなか」も、純粋程度の副詞であり程度限定のみを行う。それゆえ、共起する形容詞・形容動詞・動詞は基本的に肯定「とても」と違いはない。しかし肯定「とても」と代替不可能な表現もある。(62)の「違う」や(63)(64)の「苦しむ」「苦しんでいる」は「とても」との共起には問題なかったが、副詞が「なかなか」になると少し違和感が出てくる。他にも「汚い」「気持ち悪い」などとは相性が悪い。逆に(66)(67)では「とても」と共起不可能であるのに、(68)(69)のような場面では容易に「なかなか」と共起可能となる。

(61)　かわいい　美しい　醜い　綺麗だ　馬鹿だ　なまいきだ
(62)　異なる　?違う
(63)　?苦しむ　喜ぶ　可愛がる　苦労する　太る　温まる
(64)　?苦しんでいる　喜んでいる　苦労している　太っている　温まっている
(65)　*在る　*居る
(66)　走る　吹く　押す　歩く
(67)　投げる　死ぬ　開く

(68)　（競馬場で）あの馬はなかなか走るねぇ
(69)　（コーチが投球練習をする選手を見て）君、なかなか投げるじゃないか

この事から、同じ純粋程度の副詞における各副詞の違いは、単にそれぞれが表す‘程度’の差だけでなく、それ以外にも、固有に持つ独自の特徴から生まれる違いもあることがうかがえる。「なかなか」に関して言えば、「違う」「苦しむ」「汚い」「気持ち悪い」といったマイナスイメージの述語とは相性が悪くなることや、「やる」「走る」「投げる」など、肯定「とても」では共起できない動詞（動詞が表す在り様自体に程度性がな

い単なる動作動詞）とも直接共起可能となることがその特徴として挙げられる。これら肯定副詞間の違いについては、次の章で詳しくみていく。

3.4 肯定の「まったく」

肯定「まったく」も、純粋程度副詞に属し、基本的に程度限定のみを行う。純粋に程度限定を行う場合、共起する形容詞・形容動詞・動詞は基本的に肯定「とても」と違いはない。

(70)　かわいい　美しい　醜い　綺麗だ　馬鹿だ　なまいきだ
(71)　異なる　違う
(72)　苦しむ　喜ぶ　可愛がる　苦労する　太る　温まる
(73)　苦しんでいる　喜んでいる　苦労している　太っている　温まっている
(74)　*在る　*居る
(75)　*走る　*吹く　*押す　*歩く
(76)　*投げる　*死ぬ　*開く

(77)　（人の意見に同調する時に）まったくだ。
(78)　まったく、走りすぎだよ。
(79)　まったく、寝るなよ。

しかし、(77)～(79)のような程度限定からは離れた用法で使われる場合もあり、このような場合は共起する述語の制限は無くなり、(74)～(76)のような動詞も問題なく共起できるようになる。また、このような表現であれば、(79)のような否定表現においても、その機能に変化無く共起する。

４．肯定表現における各副詞の特徴

今まで同種の副詞（仁田(2002)では「純粋程度副詞」）として扱われてきた肯定副詞の「とても」「なかなか」「まったく」は共起する述語も共通する（形容詞・形容動詞・状態動詞・非限界動詞の一部）とされてきたが、３．でも見たように、実際のところ各用例を見ていくと、それぞれ独自の要素を有し、共起する述語に違いが見られる。ここではそれらの違いに注目し、各副詞も持つ独自の要素の特徴を明らかにしていく。

4.1「なかなか」の‘評価’の要素

肯定表現での「とても」「なかなか」において、共起可能な述語に違いがみられる例として次のような例文が挙げられる。

(80)　なかなか（やるねぇ／走るねぇ）
(81)　*とても（やるねぇ／走るねぇ）

仁田(2002)では、「走る」は非限界動詞ではあるが、その非限界性は走る‘量（時間）’についての非限界性で、「走る」という動作そのものに非限界的な段階・レベルが存在することによる非限界性とは違うと述べ、「走る」と「とても」「なかなか」「まったく」などの純粋程度副詞との共起を否定している。しかし(80)は日常会話でもよく耳にするフレーズであり、仁田(2002)に対する反例と言えよう。

このような事実に対し、まず仁田(2002)の応用として‘読み込み説’を挙げるが、この説は(80)(81)の現象を説明するにふさわしいものではないと私は予想する。

4.1.1 読み込み説

(80)'　なかなか〈上手く〉（やるねぇ／走るねぇ）

「走る」「やる」といった、動きの量（時間）に対する非限界性から由来する程度性しか持っていない述語や、動きにも限界がある述語（限界変化動詞「死ぬ」「開く」「届く」など）は、単独では動作そのものの在り様の程度性は持ち合わせない。しかしそれに「上手く」「上手に」「順調に」「あっさり」などの様態限定を付与する副詞を加えることは可能である。そこで(80)(81)ではこれら様態の副詞の読み込みが行われていると考える。

この説は仁田(2002)が、「非常に」「極めて」などの純粋程度副詞が、本来共起不可能とされる動詞「飲む」（一般に数量限定しかされないはずの単なる動作動詞）と共起した際に、逸脱性が薄れる理由として述べた説明を参考にしたものである。以下に、その本文を抜粋する。

> (36)　??お酒を非常に飲んだ／??非常に歩いた
> (37)　??お酒を極めて飲んだ／??極めて歩いた
>
> …「非常ニ」「極メテ」は(36)(37)が示すように、主体や対象の数量限定が表されたり、動きの量の限定が行われたりする構文に挿入されると、逸脱性が生じてしまう。もし逸脱性が薄れる場合があるとすれば、「お酒を非常に｛たくさん／多量に｝飲んだ」とか「極めて｛よく／長時間｝歩いた」のように、何らかの量限定を付与する成分を読み込んで解釈している場合である。…（仁田 2002；第６章）

しかしながら、仁田(2002)を参考にしたこの説では、(80)'のような様態の副詞の読み込みが行われていると考えたとしても、ではどうして「なかなか」では読み込み後の文は容認され、「とても」の場合容認されないのかという疑問に答えることはできていない。

では次に、私が考えた‘程度性付与説’の説明に入る。

4.1.2 程度性付与説

(82)　なかなかだね
(83)　*とてもだね

2.3 でも触れたように、「なかなか」には純粋な程度限定の他に、“評価”という要素を持っている。この要素は、(82)(83)が示すように、単独で副詞が使用できることからも証明できる。また、(80)(81)で表現されている動詞「やる」や「走る」の程度性というのは、仁田(2002)の言うような動きの量（時間）に対する非限界性から由来する程度性ではなく、動作そのものの在り様の程度性である。程度性付与説では、“評価”の要素があることによって、通常、‘量（時間）’に対する非限界性から由来する程度性しか持たない「走る」「やる」といった述語に、動作そのものの程度性（以下、‘純粋程度性’とする）が付与されるのではないかと予想する。

副詞をあたかも形容詞のように使用した際、「なかなか」は単独でも意味をなすが、「とても」はそれができない。つまり「なかなか」はそれ自体で対象あるいは自己に関する＋の評価の意を表すことができるのである。(82)の他にも「なかなかの物」「なかなかの腕前」といった表現が挙げられる。これらは「なかなかの」という修飾がされているだけで、「物」「腕前」がある一定以上の程度を有していること容易に想像させる。この“評価”の要素があることによって、普段は動作の量（時間）の非限界性ばかりにスポットがあたって、純粋程度副詞とは共起できないはずの単なる動作動詞「やる」や「走る」も、何らかの程度の評価があることが予想されて、動作そのものの表す在り様の程度性に焦点が合わせられるという考え方である。すなわち“評価”の要素を持った「なかなか」は純粋程度副詞の「純粋程度限定のみ行う（量限定はしえない）」という規則は厳密に守ったまま、時に、述語に純粋程度性を与え、その程度限定を行うことができるのである。

“評価”の要素を持つ副詞には他にも「けっこう」が挙げられる。

(84)　（上手に踊る芸者を見て殿が言う）けっこう、けっこう
(85)　それはけっこうな事ですね

仁田(2002)で量程度の副詞に分類されている「けっこう」は、「走る」や「やる」といった単なる動作動詞と共起する場合は量（時間）に関する程度限定を行い、純粋な程度限定は行なわないはずである。しかし「けっこう」の場合“評価”の要素をもっているため、「走る」や「やる」に対しても純粋程度限定の解釈を成り立たせることができる。

(86)　a.　（何度も素振りをするバッターを見て）なかなかやるねぇ
　　b.　（何度も素振りをするバッターを見て）けっこうやるねぇ
(87)　（何度も素振りをするバッターを見て）ずいぶんやるねぇ

(86)a、b は、素振りの回数に注目しているわけではなく、バッターの素振りから見て取れる素質を評価しての発言、つまり素振りの在り様の程度限定だと解釈する方が自然と言える。一方(87)は、素振りの回数に注目した発言と解釈するのが自然であろう。これは「けっこう」と同じく量程度副詞である「ずいぶん」は、「なかなか」や「けっこう」とは違い“評価”の要素を持ち合わせていないため、「やる」に純粋な程度性を付与することができず、その限定の対象が量に関する程度性のままだからである。そして(86)bでは「けっこう」の持つ“評価”の要素のため、純粋程度性の付与が行われ、素振りの表す在り様の程度の限定と解釈することができる。ただ「けっこう」はそもそも量程度副詞であるため、程度性の付与を行わず、(87)の「ずいぶん」のような量限定の解釈も採ることができる。

わたしは、(80)(81)の例文が示す肯定程度副詞「とても」と「なかなか」の間に存在する違いの解答としては後者の説を提案したい。

4.2「まったく」の‘実感の強調’の要素

(88)　まったく新しいジャンルの音楽だよ
(89)　まったく同感です
(90)　まったく違う答えが出揃った
(91)　あの娘はまったくかわいいねぇ
(92)　あの映画には、まったく感動したよ
(93)　あの事件には、まったく驚いた
(94)　まったく迷惑な話です
(95)　まったく心配したんだから

(88)～(95)に挙げた例文は、いずれも肯定表現において副詞「まったく」が使われている例であるが、多くの人がその「まったく」の意味合いに多少違いを感じるのではないだろうか。一見どれも「まったく」による述語の程度限定が行われているように見えるが、実は「まったく」の作用には純粋な程度限定の他に、話し手の実感を強調する作

用がある。両者の機能の違いが特にわかり易い例は上記の(88)と(95)で、(88)は純粋に程度限定をして、述語「新しい」の程度が非常にはなはだしいことを表現し、(95)は述語の程度限定とは違い、自己の実感を強調するために用いられている。このように肯定「まったく」には、純粋程度の副詞として述語の持つ程度性を限定するという機能の他に、‘ 実感の強調 ’ という別の機能を有している。

しかし、ここで注意しなければならないのは、これらの機能は共起する述語などに違いはなく、その使い分けは、主に話し手の意図している内容によるということである。つまり、上記の(88)と(95)の解釈も、私が「この表現ならば一般にこの解釈なのではないか」と、あくまで個人的主観で判断したものであって、実際のところは(88)〜(95)いずれの解釈も、文を見ただけで副詞「まったく」の機能を断定することはできないのである。人によっては自分と逆の解釈をしているかもしれないし、話し手自身も ‘ 純粋な程度限定 ’ と ‘ 実感の強調 ’ を明確に区別した上で使用していない場合も多々ある。ただ、自分の解釈が ‘ 純粋な程度限定 ’ なのか ‘ 実感の強調 ’ なのかを判断したい時の判断材料として、「まったく」のより口語的な表現である「ったく」がある。「ったく」は ‘ 実感の強調 ’ の機能しか持っていないため、文中の「まったく」を「ったく」に置き換えても文意に変化が起こらなければ、その「まったく」の機能は ‘ 実感の強調 ’ であると言え、もし違和感や逸脱性を生じてしまう場合は、「まったく」がそこで発揮している機能は純粋な程度限定だと言える。

(88)'　*ったく新しいジャンルの音楽だよ
(92)'　?あの映画には、ったく感動したよ
(93)'　?あの事件には、ったく驚いたよ
(94)'　ったく迷惑な話です
(95)'　ったく心配したんだから

「ったく」に置き換えることによって多少文全体が口語的なものになるものの、(94)'(95)'は(94)(95)の場合と文意の変化はない一方、(88)'は(88)とは文のニュアンスが変わる、と多くの人は感じるのではないだろうか。それは大多数の人が(88)では述語「新しい」の純粋な程度限定のみ行われている解釈を採ったからである。もちろん(88)の「まったく」を実感の強調だと認識し解釈していれば、(88)'も同じ文意として解釈できるだろう。ただ(92)(93)に関しては、その解釈は状況や言い方によってさまざまで、(92)'(93)'になって文意が変化するかどうかは個人によってかなり違いがあるように思われる。

このように、「純粋な程度限定」なのか「実感の強調」なのか、はっきりとした区別をつけることのできないものもあり、解釈がどちらかに完全に分離するわけではない。また、程度限定も行われた上で、その実感の強調も行われているという混合型解釈が行われている場合もあるかもしれない。ただ、純粋な程度限定のみ行われているという解釈が成り立ちやすい述語があり、（新しい／同じ／同一である／逆である／別である／違う／異なる／同感する）などが挙げられる。これらは共通して完全なる状態というものが比較的存在しやすく、また実感しやすい述語と言える。もちろんこれらの述語でも、実感の強調として「まったく」が共起することはできるが、その場合はかなり口語的な表現となることが多い。

さらに実感の強調をする際の「まったく」は、文中よりも文頭にきた方がすんなりと解釈がいく場合が多く（(92)"(93)"）、(96)も併せ、もはや副詞という形態素から離れて、感嘆詞と言うべきものもある。

(92)"　ったく、あの映画には感動したよ
(93)"　ったく、あの事件には驚いたよ
(96)　ったく、しょうがないなぁ

このような場合はもはや程度副詞の面影はなく、「まったく」「ったく」は他の述語とは独立した、独自の意味を持つ形態素として、文意の形成に貢献している。

５．まとめ

本論文では仁田(2002)の程度副詞の分類をもとに、肯定・否定両表現に使用される「とても」「なかなか」「まったく」の三つの副詞を軸とした意味論的な分析を試みた。以下に各章の内容を簡単にまとめる。

１．では、先行研究である仁田(2002)の内容を紹介すると共に、副詞と述語との共起制限を語る上で重要となってくる動詞の分類を行った。仁田(2002)で紹介された純粋程度の副詞と共起する動詞の分類に、金田一氏の４分類を併せ、「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」の３つに動詞を大別し、各副詞との共起を探る上での参考とした。

２．では、まず 2.1 で、仁田(2002)であまり言及されなかった否定表現における程度副詞について、その機能を４つに分け、それぞれの機能の説明を行った。そして 2.2～2.3 で「とても」「なかなか」「まったく」を個別に検証した。否定表現の場合、この３つの副詞の機能はそれぞれ異なり、「とても」は‘可能性の限定’を、「なかなか」は‘既遂の限定’‘数量限定’を、「まったく」はあらゆる限定が可能となる。共起する述語の種類は基本的に「とても」「なかなか」は共通して継続動詞・瞬間動詞など、変化を表す動詞のみであるのに対し、「まったく」は形容詞・形容動詞・動詞と、ほとんどの述語と共起可能である。

３．では肯定表現の程度副詞の機能に注目した。「とても」「なかなか」「まったく」に関しては、共起する述語もほとんど共通しており、従来の研究ではこの３つの副詞は基本的に同じ機能（純粋な程度限定）を有するものとして一括りにされていたが、この章ではそれぞれが持つオリジナルの表現にも注目してみた。「なかなかやるなぁ」や「まったくだ」に代表される各副詞の特徴は、従来の研究で言われてきた程度限定とは区別されるべきものである。

４．では３．で示した肯定表現における「なかなか」と「まったく」の独自の要素について取り上げ、詳しく分析している。「なかなか」は「なかなかだ」など修飾する述語が無くても、単独で評価の意を表せることから、‘評価の要素’を持っていると言える。この要素があるがために、一般的には純粋程度の副詞とは共起できないとされる単なる動作動詞や限界変化動詞などとも共起が可能となる。この仕組みを説明したものが‘程度性付与説’である。また「まったく」も「まったくだ」や「まったくもう」などの表現があることから、それ自体で意味を持っていると言える。この要素を‘実感の強調’とし、肯定「まったく」にも純粋な程度限定を行っている場合と、程度限定からは離れて‘実感の確認’を行っている場合があることを示している。‘実感の強調’が行われている場合、「まったく」は「ったく」と置き換え可能となり、もはや感嘆詞と言うべき役目を果たすこともある。

このように、本論文では、日本語程度副詞の中でも特に、肯定・否定両表現にまたがって使用される「とても」「なかなか」「まったく」の３つの副詞に注目し、それらの特徴を明らかにしてきた。肯定表現では共に「純粋程度の副詞」として働いているこれら３つの副詞は、否定表現になると、各副詞の機能はそれぞれ異なり、いずれも肯定表現とは違う働きをする。また、肯定表現において「なかなか」「まったく」がそれぞれ独自の要素を持ち、単なる程度限定から離れた機能を発揮するということも示したわけだが、このことから逆に肯定表現における「とても」が他の副詞に比べて中立的な副詞であることも明らかになったと言えよう。しかしながら、本研究で明らかになったことは日本語程度副詞についてのほんの一部分に過ぎず、まだまだ各副詞を個別に観察し、分析・研究するべき余地が多く残されている。今後も、日々日常で使用される副詞に注目し、更なる探求に努めていきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたり、上山あゆみ先生には、ご多忙の中、数多くの貴重なアドバイスと丁寧なご指導をいただきました。心より感謝いたします。また、提出直前までさまざまな面でご助言、ご助力をいただいた九州大学言語学研究室の皆様をはじめ、本論文完成のためにご協力いただいたすべての方に、最大限の謝意を表します。

参考文献

金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』東京：むぎ書房
金水 敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『日本語の文法２　時・否定の取り立て』東京：岩波書店
仁田義雄(2002)『新日本語文法選書３　副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版
飛田良文・浅田秀子(2001)『現代副詞用法辞典』東京：東京堂出版